

## 駅売弁当に関する調査(報4)

小田きく子 (昭和女大 生活科学)

目的：駅売弁当が明治18年にはじめて発売されてから 110年が経ち、その利用も旅行中の食事から楽しむものにと変化している。そこで、利用者の駅弁に対する意識を調査し、過去の調査結果と比較し、今後の展望を推察したいと考えた。

方法：1994年10月(平成6年)、20才代女子大生 500名を対象にアンケート調査を実施した。回収率は65%であった。この結果を1976年(昭和51年)と1988年(昭和63年)の調査結果と比較した。

結果：駅弁の喫食経験者は93.6%で大半が駅弁を食べているが、20年前の方が99.2%とさらに多かった。喫食の目的はいずれの時も「旅行中の食事」ではあったが、今回は57.8%に減り、以前ではわずかであった「デパートの催物にあった」というのが17.3%と増加が目立った。また「有名だから食べてみた」というのが20年前では17.6%もあったが、今回は7.6%と減少が大きかった。購入場所は「構内売店」が55.5%で、「ホームの立売利用」はわずか6.4%になっていた。20年前には「ホームの立売利用」は37.8%で、「構内売店」利用の28.0%より多かった。駅弁の今後についての質問に対して、今回は1位 特殊なものだけ残る 44.4%、2位 今のまま 25.3%、3位 発展する 8.9%の順であったが、20年前では1位 発展する 33.9%、2位 なくなる 26.5%、3位 今のまま 25.8%であった。国鉄の民営化、列車の高速化などの社会の変化に伴い駅弁の利用においても意識が大きく変化してきていることがわかった。今後は販売方法や利用目的にも今とはまったく違った方法や目的が出現すると推察できる。